836
209
3

芳草年録

堤蟻叢書

九十八

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

隄蟻叢書　五八

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

豊前守殿江渡

来二月　御上洛御行還事御道　御旅館之
御休泊ニ而　御付候ニ付名数書ニ而
近辺為心得差越候間　御旅館
其御都合ニ本陣並寺院ニ　御旅館被
補候ニ不及其分ニ道筋御道橋ニ而
両様ニ有之候　右之趣ニ而
和泉守殿江渡

九月

御上洛之節御供御付衆之内ニ而死亡人数且
負数ニ而手負之者御供御人数ニ而
御先ニ而御付御道具

高野藏書
正
9. 5. 27
請求

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

一附渡人附渡ニ付而ハ諸荷物ハ不及申ニ付差出し書付差詰候ハヽ前ニ
差出候様可仕候事

堤日人附渡

一上酒ハ道中久能山ニ社参ハ通筋ニ付出し候時ハ後ニ而ハ不申候事

九月

一上酒ハ道筋見合ニ而用意ニ拙者ハ不及候共人目有之候ハヽ道中触知行
所ニ而ハ宿村ニ而ハ無用ニ候事

一若宗来石お請ニ村役人ハ内証ニ而ハ不申候事

右之趣可被心得候以上

十月

長井五左衛門
松平数馬

一来二月　一上酒ニ付差出候ニ而ハ不及申候事

一菊土屋中ニ而ハ無構候ハヽ諸荷物ハ不及申ニ候ハヽ
荷之目録ニ而ハ不及申候事

右之趣可被心得候事

十月

一上酒ハ道筋ニ而ハ無構候ハヽ諸荷物ハ不及申ニ候ハヽ
荷之目録ニ而ハ不及申候事

一附渡人数ハ員数ハ目録ニ而ハ不及申候事

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

十月九日

和泉守殿小姓

甲斐路ニ付少旅本ヲ面ニ中達ス覚

一 衣服ヲ武家ヲ通剃羽織袴当行或ハ小袴伊賀袴半天袴ヲ用ユ事
但軍服ヲ用ルヲモ妨ケ無キ事

一 徒若党小者中ニ衣服ヲ一定ヲ通ス以下略

一 武具ヲ具ニ完成用ノ残ヲ用ル事

一 鞍覆駄覆毛氈天鵞絨毛革等用
右ニ紋ヲ付ル事ヲ禁ス但馬印ハ此限ニ非ス

一 幕ヲ馬簡ニ不張掛ケ候ヲ用ユ事

神保伯耆守
大井十左ヱ門
山口信濃守

一 駕馬ヲ作ヲ面ヲ以テ前地即差留ヲ駕ヲ等ヲ作ヲ面ヲ以テ
途中筋ヲ行列ニ加ヲ事ヲ禁ス但病人ヲ為ニ駕籠ヲ用ユル不苦事

一 騎ヲ馬ヲ作ヲ面ヲ以テ相決ヲ支ヲ作ヲ石連ヲ下人一日紙令報ヲ事

一 此作ヲ廻ヲ家ヲ来ヲ子道具ヲ等ヲ及ヲ子
右書面ヲ通ヲ心得ヲ可ヲ旅宿ヲ等ヲ事

十月

小川人ヲ作

甲斐路ヲ着ヲ面ヲ以テ役ヲ人ヲ不及ヲ作ヲ出ヲ立ヲ候ヲ後ヲ表ヲ札ヲ
出ヲ申ヲ右ヲ急ヲ用ヲ之ヲ通ヲ事

和泉守殿

甲斐路ヲ着ヲ石連ヲ人数ヲ覚

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

講武所奉行

一 具足 但革胴丸袖付 一領
一 徒士並士分 指figure 一人
但此分中弓小者おゐて鉄炮人数指figure人
雨具共ニ三千石以上

一 具足 但革胴丸 一領
一 従並士分 九人 一馬 figure匹
但此分中弓小者おゐて鉄炮人数弐人
三千石以下衣布以上

一 具足 但革胴丸 一領
一 士分 五人 一馬 figure匹

但此分中弓小者おゐて鉄炮人数指figure人
布衣以下ハ当方並ノ扱人

一 具足 但前同断 一領
但此分中弓小者おゐて鉄炮人数九人

御目見以下百俵以上

一 若党 figure人 但此分小荷駄おゐて鉄炮人数三人
四百石俵以下

一 小者 figure人 但小給ニてハ合おゐて鉄炮
右ニ通御役人数減figure
右ニ準シ可申候
付ニ而ハ書出ス

十月

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

来春　吟上路と仕出の如く方今物価騰貴と庶民困難より拘ず速に仕遣おおせ付られ候儀と存候得共暑気の節柄人馬共に難渋致し候儀と存候間暫く延引仕候様致度旨願出候ニ付速に御取計人数と雖も小者と雖も減ず一士も多く向ふへ差出候様吟上路へ申渡候事

従四人口減ず

来二月　吟上路と共に向ふへ遣し候筈に候得共未だ調不申候間暫く延引仕候様致度旨願出候ニ付右の通申渡候事

十月

吟徳院中

講武所より

吟上路と義炮術修行人数内小隊の者共と共に部屋住共今年より十五才より四拾才迄の者共に限り小隊の儀は人数不拘差出候様致度旨願出候ニ付右の通申渡候事

成十月

和泉守殿吟徳

今春　吟上路と義文吟七例年に不変相違之儀と存候ニ付是迄吟物義も御用向に差支候儀無之候ニ付暑中節廃おおせ付られ候様致度旨願出候ニ付右の通申渡候事

吟徳院殿御実母従二位様御薨去ニ付是迄吟物義も御用向に差支候儀無之候ニ付暑中節廃おおせ付られ候様致度旨願出候ニ付右の通申渡候事

方等と御糸を加へ一両と吟用おおせ付られ候ニ付

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

銀子を渡し拵銭ハ不出精定以格別ニ致省略　御評定所へ相伺一ヶ所ニ候
右之趣御老中御伺之上被仰渡ニ而浅野相済候　十月
和泉守殿御渡　御目付　小出五郎左衛門
未二月　御上洛御供之面々万石以下ニ而御扶持方渡方之義分限ニ応し一倍之積
と以此日数七十日分之内日数三十日分ハ京地御渡方之積ニ付日数四十日分浅草
御蔵ニ而相渡候筈ニ付当十一月中ニ御勘定所ニ而受取手形差出候ハゝ御勘定組頭裏判いたし
十二月中請取候様請取方可被得其意候
右之通可心得諸向方之義ハ川勝丹波守　村田近江守　池野勇ノ助ニ而申合候
右之趣可被相触候
和泉守殿御渡　御目付　松浦五郎左衛門
未二月　御上洛供之面々町方下屋敷之者ヲ以高請負買限在之者

之上格別困窮之面々引下候ニ付無之心得出精可致候町方ニ而相触候京都迄之
道中路道筋ニ而直段出候ハゝ町奉行ニ而取計候面々其心得ニ而可致候
ヲ以引請方之義ハ当日出之者又ハ宿場中付ニ而者請負次第ニ而可致相通日雇引
受之者不埒之者有之候ハゝ不正之取計ニ付町奉行ニ而其段可申達候町奉行所ニ而吟味
一　武士方一季居之奉公人抱ヶ月ニ而年季之人請負次第ニ而相応之文人ニ而其儀可仕
ハ筈ニ付右之人分雇出し之義ハ格別ニ候奉公人分雇方之義仕候ハゝ此町方ニ而相触候
其旨可心得若違背致し候者有之ハ其段町奉行ニ而可申達候右者御供ハ勿論其面々義
同様之候ニ付　右之通可被相触候　十一月
ミタシ　御使番衆　御徒頭衆　小十人頭衆　御納戸頭衆　御細工頭衆
御上洛之節御道中ニ而御供并勤番ハ勿論当番之者ハ其外銀子御経
費御職在之候ハゝ御供并勤番ハ勿論之者人数書付を以御勘定所へ可被差出候

十一月

神保伯耆守
大井十太郎
山口信濃守

和泉守殿御渡

御上洛御供之面々万石以下之者御扶持方諸方之義分限ニ應し一倍之積を以
相渡候筈ニ候先達而御作連着照合方之義ニ付是又追而可被仰出候右御
扶持方之義場所ニ應し一倍之積を以相渡候積ニ候得共相渡京地ニ而
渡候筈ニ候条其段可被心得候事

十二月

ミタラシ
御徒頭衆

天保五年日光 御参詣之節 御参詣御当日御道筋并 御見通延留切之義も小荷駄掃
之御進退向ニ而左之通申渡候 御徒之者掃除振合之者共出入不致存知細御有無

可為御手当哉之段奉伺候 十二月五日

神保伯耆守
大井十太郎
山口信濃守

答下ケ札

御書面之趣天保五日光 御参詣之節当地殿部屋焼失致し私共宅へ

一 御参詣御当日并御道筋小荷駄掃除差出候ニ付為当切之掃除差出候

一 御参詣之節江戸表御留守之残り御用之内ゟ五六人程差出御道筋掃除為相勤候

ニ準し候儀ニ付御参詣之節之 十二月五日 御徒頭

玄蕃頭殿御渡

御上洛ニ付御細工所々諸向京地江差遣候ニ付御当地ゟ之者共
一同ニ而京地江可差遣哉伺之通可被心得候
右之通可被相心得候事

和泉守殿ゟ渡ゟ日付神保伯耆宛達

ゟ上洛之節向ゟ作事ゟ其外共ゟ為ゟ
右ゟ趣ゟ引合出ゟ取扱ゟ一旦ゟ日付ゟ以ゟ
御口ゟ達場所出ゟ事ゟ
一二條ゟ樹ゟ出ゟ残ゟ有ゟ江戸表ゟ
有之通何ゟ為ゟ御ゟ存ゟ
差出ゟ紙ゟ趣ゟ致ゟ十枝ゟ

十二月

神保伯耆守
太井長渡守
山口信渡守
池田修理

ゟ上洛之節ゟ諸向ゟ残ゟ
木寸ゟ右ゟ支ゟ木ゟ働ゟ作ゟ別限ゟ一時ゟ二寸ゟ
違ゟ御ゟ残ゟ作ゟ所ゟ作ゟ
頃ゟ残ゟ
ゟ旅館ゟ作ゟ寸法ゟ出ゟ作
右ゟ通何ゟ為ゟ

十二月

神保伯耆守
太井長渡守
山口信渡守
池田修理

ミタシ
ゟ使者ゟ
ゟ上洛之節諸向ゟ作ゟ別限ゟ一時ゟ

一 旅道中着座之入口御行列ニ而ハ提灯之義是迄之通ニ而宜敷候哉　御成之節ニ而ハ振
合これ心得方ニ致し自分提灯為持可被
右之通伺書付ニ依之申達候　十二月

大井美濃守
山口信濃守
池田修理

御使番衆　御徒頭衆　小十人衆　小納戸頭衆　御腰物奉行衆
御上洛之節　御休泊宿之下馬所下乗所之義向後多人数ニ付混雑致候
御休泊　御旅館前後之目印棍木建置右御行列之ものとも右下馬所内建
場ニおゐて乗馬為致且　御旅館　御入込相済迄右下馬所内ニ差控
候様御通可被相触候
十二月　右之通伺書付ニ依之申達候

伊沢美作守

同断
新番頭衆　御使番衆　御徒頭衆　小十人頭衆
御上洛之節御宿所前後御休泊ニおゐて御着之節明六ツ時出立之節　御先ニ御用
之もの共御通行前後之向ニ而人之姓名家来人数荷物等之員
数認差出右書面ニ而御供之拙者共ニ而可致御通之節相渡し差出候向ニ而御通
通行之節ハ路々持参御宿所ニ而差出候通可被相触候
右之通伺書付ニ依之申達候　十二月

大井美濃守
山口信濃守
池田修理

御徒頭家来
御徒組頭家来
御徒方小者
申渡　(下)　御徒頭

ミタシ
御使番衆　御徒頭衆　小十人頭衆　御納戸頭衆　御腰物奉行衆
御上洛之節　御供并御供之面々旅宿御通筋ニおゐて幕を張り上見世之内明ケ
置候而儀ハ方ニ而者雑人共を掃除申付座ニ茂見世ハ左右ニ幕を張置候
之戸前表之方ニ建置之候　[illegible]目障ニ不成様小家之幕を張置候而見世之方
明置雑人共ハ表之方又者裏店明ケ置候者不入候　御目障ニ不成様差置可申候
右之通御手洗中江依之申達候　十二月

伊沢美作守
大井[illegible]守
京極能登守
山口信濃守
池田修理

ミタシ
御使番衆　御徒頭衆　小十人頭衆　御納戸頭衆　御腰物奉行衆
御上洛之節御供并
先番当之面々者非番之者共　御発駕御刻限ニ不拘
御先江出立仕先番当申付候様　御出立後御跡供仕其外立掃除可被致
右之通御手洗中江依之申達候　十二月十日

伊沢美作守
大井[illegible]守
京極能登守
山口信濃守
池田修理

ミタシ
御徒頭江

覚

御上洛之節旅行道中目安箱之通被仰付候　御駕籠近之面々之儀
人数押之者共之儀者御徒之者相勤候ニ付心得可有之御目付江可被申談事

守上洛之前守代之両下知之時天両天之一同書写之事

十二月

以同人守護

守上洛之節守護中墨引之内之在之寺社領相違儀附二而ハ訴之時天守之二右双方共ニ召之
之会儀附之事　但訴之在二会明儀附右同断之事

右之通　守上洛守代之両之ニ而ハ可有之事

以同人守護

守上洛之付二條　守城守居之別　守同之
ニ而ハ可有之事

十二月

守上洛之節　守之留主中諸役人諸職人等ニ守領地之内ニ而
ハ可有之事

十二月

大井喜清寺

京極能登守

山口信濃守

池田修理

小笠原宇内殿

内藤甚平殿

右来二月　守上洛之節守代ニ仕付ハ可右二組を守代
守代共ニ荷物持之事ハ紀伊守殿ニ守代之守自分之
和泉守殿之儀ハ自分ハ不参之事

来二月　守上洛守道中筋御先ニ而ハ又ハ迎ハ

門樹伺候上相不仕候段不届ニ付 各寮老中 若年寄共、
みつ巳使者飛札使不差越候段不届ニ付 門番
一 此度本通筋ニ而出火之節 此段之文言不差出候義ハ右ニ准し 一ノ御殿向ハ 龍寺院ニ
同断ニ 思召一切之品不仕候ニ付 右之通 申渡候 十二月
ミタシ
門目付
門徒院

一 小荷駄掛ニ門徒院一統ニ内五六人ヲ 護衛可被仰付之旨 御側衆ヨリ
一 お銭ハ右ノ使ヲ以可差遣 旨 門先門徒ニ
ハ掛ニ而ハ右ノ通ニ 門通ニ左右ニ付ル御
一 門主御帰寺 門通中 門旅館 表ハ内ニ
衣服ニ而ハ不差通 申通 御目見ニ入ル 何品ニ而ハ
お湯供 諸役人 表ハ分ニ掛ニ候 御
積ニ 右之通 御本湯ニ御入ニ 十二月

用部屋 御坊主 門用部屋 池田修理 達
一 門主御帰寺ニ付 諸向ニ 諸家 野袴 門
御小姓 門用ニ 出ル 門通 門用ニ 池
ハ ニ 書加ヘ 出ル
右之通 御坊主 御届ニ 十二月

一 ㇾ仕奉候 ㇾ仕候候 十人許候 ㇾ綱引候 ㇾ腰物を取候

一 ㇾ上洛之節 ㇾ通筋宿々其外野原等ニ而 都而 雪降候節ハ道筋不案内ニ而 通信おくれ候間 前ニ而 男を頼候方ニ而 男を雇候ハゝ 同道ニ而 おくれ候節 所々ニ而 集金ニ而 ㇾ上洛之節

一 道中宿々ニ而 宿ニ而 女小供を軒下ニ 居させ 男を家ニ内土間ニ 居させ候段 村方ニ而 無体ニ 五六百人引請 女小供を 居させ候儀 ㇾ上洛之節

一 宿ニ而 並ニ 桶之中ニ 湯を取候ニ 其外ニ 入候節 小供ニ 湯を 呉候儀 ㇾ上洛之節

一 道中ニ而 名主ニ 候ハゝ 組合村ニ ㇾ通筋ニ 高掛ニ ㇾ上洛之節 ㇾ通筋ニ 従来を 相勤候ニ 相違候ニ ㇾ通筋ニ

一 ㇾ通筋ニ ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ仕候 ㇾ上洛之節 ㇾ通筋ニ 人馬一切 ㇾ通筋ニ

出ス 旅人ニ ㇾ通筋ニ 候ニ 付 人馬一切 ㇾ通筋ニ 従来を 相勤候ニ 相違候ニ ㇾ通筋ニ

右之 段々 御触ニ 付 ㇾ通筋ニ 御取調ニ 相成候ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ

ㇾ仕候頃

天保廿日光 ㇾ上洛之節 ㇾ通筋ニ 張紙ニ 相触候ニ 付 ㇾ通筋ニ

ㇾ仕候節ハ 御触ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ

ㇾ仕候 ㇾ仕候 ㇾ仕候 ㇾ仕候 ㇾ仕候

伊勢参宮 竹本甲斐 大井参宮 京極能登 山口信濃 池田修理

用場ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ 御触ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ

来二月 ㇾ上洛之節 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ

都ニ 御触ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ 候ニ 付 ㇾ通筋ニ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

町奉行より来二月 町奉行より通之候間、其旨可相心得候、以上

十二月

杉浦兵庫頭
河井継之助
高橋謙蔵
木場貞長

右之通万石以上以下若年寄より諸向へ可達旨、来二月 町奉行より通之候間、其旨可相心得候、以上

十二月

町奉行より来二月 町奉行より通之候間、其旨可相心得候、以上

十二月

近年町人百姓共へ用達被仰付候儀不苦旨、御触書等相渡候儀も有之候得共、元来用達之儀は、一国一城之主抔之儀ニ候処、近来は一万石以下之者へも被仰付候儀ニ而、甚以不都合之儀ニ候、向後は万石以上以下若年寄より可被仰渡候、以上

十二月

和泉守殿 大目付 印

町奉行所与力 大目付 五人
同 同心 三人
小人目付 十七人

来二月 町奉行より右之通申渡候間、其旨可相心得候、以上

十二月

大目付 印
目付 印
徒目付 印

御三卿 大納言殿 御家

右之通被仰出候間御届申上候以上

未二月 戸上治三郎久敬山 戸社家還 御三卿

戸社家之通可申達旨 仰出候間此段申上候以上

戸社家還 仰出候節万石以上以下之仕分

見written二條 御城番お番入之節之仕分同様之事

和泉守殿 戸治三郎 連名

未二月

ミタシ
き 佐頭巾

無地無紋

弓尾袴 着用之事

紙衣

未二月 軍艦之節 戸上治三郎 連名 仰出候間此段申上候以上

支配向之内減お召之節ハ面掛ケ大目付ニお届ケ之事

但 戸減ニ而 御文お初メ之印紙中ニ記之事

和泉守殿 以下之日付ハ省略之事

一 戸幕長持 砂摺 一 戸幕車 四葉

右之通二度 戸上治 戸委曲之儀ハ例之通 以前日ニ玄関天井ニ掛

込之儀方ニお渡之南日諸式之行列ニお立且 戸籠数 戸京橋ニ而

之通右 戸通異持込之儀方ニお渡 戸籠数ニ而聖数又ハ諸式之行列ニ

お立之節ハ無之儀ニ付ニ仕候ニ付

以呉服

以幕 寺行

未四月

ミタミ
御使番宛　御徒頭宛　小十人頭宛　御納戸頭宛

御軍船ニ而　御上洛ニ遊ばされ候ニ付而者　御先并御供人数共減ニ而其外両御番共ニ
可被差出候処御減ニ而被差出候ニ付而者其段可被相心得候　先達而御触達有之候
以箋末可被差出候者可被一同被差出候様又ハ　伺済之上付此段被書上候近々可被申聞候

正月十日

伊沢美作守
竹本甲斐守
大井越前守
京極能登守
山口信濃守
池田修理

ミタミ
御上洛掛
御目付宛

御軍船ニ而　御上洛ニ遊ばされ候ニ付　御先并御供人数共減ニ而
諸家共様之面々御召連ニ候処　其者供連之一統ニ付上人数御減ニ相成候ニ付　御召文ニ而

御上洛御供
御籠鉄砲頭
御徒頭

当地役及御達書　正月

御徒頭宛

御上洛ニ付御供列之道具類之内並蒲御紋付白地　御条誂ニ而出来次第読ニ候処
御蒲団之義者　御鑓籠ニ而御差込来候処之付右御紋御出来ニ及不申候事
右者被仰付候御蒲団之義者不及御差出候　御召
御誂ニ付而　御召方ニ而御召替之分一組ニ而御用立候様　御両度御日夜ニ而御差替
一組宛ニ而御誂ニ付右二品一組ニ而御用立候様
右之趣御勘定方御目方方御吟味役方ニ而申談候義可被相心得候

御達候以上　亥正月

和泉守殿御渡　御目付鈴木内達
今般政事御改革之義ニ付有之候ニ付
勅使并　御使　御使之義者手紙

慶応二年閏五月廿五日　　大井忠兵衛
京都紙屋
山口信濃守
沢田修理

御軍勢ニ而も無之候ニ付、地面ニ而ハ御陣屋ニ差支候ニ付、御陣屋ハ
御里向ニ而御普請ニ取掛り候ニ付、其内ハ御家来衆ニ御預ケ被成候
而も宜敷哉ニ存候、尤御仮陣屋ニ而ハ御座候ハヽ、御家来衆ニ御預
ケ被成候而も宜敷哉ニ存候、何も御評儀之上御決定可被成候、
以上

二月廿六日　　右四名

江川太郎左衛門御目付松宮甲次郎殿

御軍勢ニ付　御上陸御逗留之節　御家来衆江
右之通ニ仕置候様ニ可仕哉ニ存候、　以上

二月廿六日

御上陸之節ニ付、御城　御番所ニ而ハ
在来之通ニ而宜敷哉ニ存候、尤御家来衆ニ
在来之通ニ而宜敷哉ニ存候、　以上

二月廿六日

右四名

一　在来之通ニ而ハ宜敷哉ニ存候、尤御上陸之節ハ御城ニ而ハ
御番所ニ而ハ無之候ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ
存候、　以上

二月廿六日

一　御在来ニ而ハ御上陸之節ニ而ハ御用ニ而ハ
無之候ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ存候、
以上

二月廿六日

和泉守殿
内匠頭殿
松宮甲次郎殿

御上陸之事ニ付、御仮一件書筆御用ニ被
遣候ニ付、御先ニ在我ニ而ハ御用ニ不
差支候ニ付、御用ニ被
遣候ニ付、御先ニ在我ニ而ハ御用ニ不
差支候ニ付、御用ニ被

但御乳御用ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ存候、
以上

二月廿六日

御在来ニ付、御上陸之節ニ而ハ御用ニ而ハ
無之候ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ存候、
以上

二月廿六日

一　在来之通ニ而ハ宜敷哉ニ存候、尤御上陸之節ハ御城ニ而ハ
御番所ニ而ハ無之候ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ
存候、　以上

二月廿六日

和泉守殿
内匠頭殿
松宮甲次郎殿

御上陸之事ニ付、御仮一件書筆御用ニ被
遣候ニ付、御先ニ在我ニ而ハ御用ニ不
差支候ニ付、御用ニ被

但御乳御用ニ付、御陣屋ニ而ハ御番所ニ而ハ宜敷哉ニ存候、
以上

二月廿六日

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

御上洛ニ付御供船之儀ハ御定之通乗組之内陸地ゟ可致大坂表ゟ御迎しこの船ゟ
且御船御積込之儀ハ不残兵庫ニ而御足込候様兼而一両年ニ御沙汰ハ可有之候

正月　　右四名

玄蕃頭殿御渡候目付川村修理御達

ミタミ　御使番衆　御徒頭衆　小十人頭衆　御納戸頭衆　ハ御備物奉行衆

覚

今般御軍艦ニ而　御上洛ニ遊候ニ付　御出帆ニ付而ハ兼而御沙汰之通御供方陸地御先ニ而御越之儀御差支之儀も有之候　減方相立候而精々上陸之足込之品持参人数荷物共減候様遂吟味いたし右人数等減少之上御残之分大目付御目付へ可申出候
右之趣　御上洛　御先ニ而相越候間心得違無之様可致候

正月

河内守殿御渡候目付衆へ之達

御軍艦ニ而　御上洛ニ遊候ニ付　御通船之節海岸ニ領分知行有之面々
御通船之節海岸ニ罷出候人数差出候船ハ不及申其外可致候且又湊々ニ有之場所限
別段人数差出候儀ハ相控其自然　御旗印等遊候節も是迄之通陸路ニ
往来之節ニ而も心得可有之海岸所々之砲台場ニ備置候大砲等之儀も御通船之節ニ付而は其備置候儀不
苦候遠見番等之儀ハ可差出ニ不及候
右之趣　御上洛　御通船ニ付海岸ニ領分知行有之面々へ可被達候

正月

和泉守殿御渡候目付衆へ同人

御上洛之節諸役人以下役服織等袴不相済候者有之候而不都合之事ニ付諸向之者ハ羽織之上着用等可致候事
但御徒以下之者ハ袴股引羽織等着用不苦候事
右之趣可被相触候事

正月

和泉守殿内海氏目付今小出吉助左之通

御家老ゟ　　内山浦ゟ通ゟ　　仕付ゟ　　内ゟ使ゟ持参
御書翰之写
猶以清水志摩助急飛脚次第ニ当浦江着船之本浦江着船
湊ニ而　内海水先ゟ通ゟ　　我ゟ乗ゟ　　右湊ゟ
為目下御達置候　　右海岸浦ゟ注料之内代官私領之
分ハ地方ニ而御取計可被成候
右之通ニ御座候　　以上

内家老ゟ　　内山浦ゟ通ゟ　　内ゟ私ゟ　　仕ゟ
浦内ゟ
浦内ゟ
清水志摩助　　内先年内仕ニ者共
右之通ニ付内先年内仕ニ者共
為御届如右之通ニ候ゟ
為念此段申上候以上

当二月　　御山浦ゟ
御書翰之写
猶以清水志摩助儀ハ
内ゟ
右之通内御定ニ
為御届如右之通ニ候ゟ
以上

当二月　　御山浦ゟ
御書翰之写
猶以清水志摩助儀ハ
内ゟ
右之通内御定ニ
為御届如右之通ニ候ゟ
以上

布衣以下之商人ニ付　正月

和泉守殿江被仰渡候月番松平伊勢守達

覚

一伊与浴之事　但在京中二條通ニ候ハヽ浴之面ニ布衣以上之向ニ而ハ不苦候ハヽ浴之儀ハ布衣以上之向ニ而ハ料理等之儀ハ勿論之事

右之通向ニ而ハ不苦候

一伊賀越之事　但通船ニ付　但通船ニ而ハ浴之儀ハ勿論之事

右之通向ニ而ハ不苦候

一泊銭　銭百四十八文　一壹銭　百銭拾四文

在京中相勤候ニ付上之人ニ付

一泊銭　三百八拾八文

下之人ニ付

一口銭　三百三拾八文

布袋壱枚ニ付

一損料銭　七百文

右之通諸面差添ニ而ハ戸浴之ニ而ハ不苦候

一

今般　門主浴之節警衛等被仰付候ニ付大坂伏見京都通行筋在々ニ而
蓋ハ不及町家共ニ而も堅ク無用ニ候通急度心得可申候
及ハ騒敷筋之儀ニ付人留ハ不及候得共
仕舞ハ　但シ通行筋人留ハ不及候得共
右之通京都大坂伏見ニ而ハ兼而ハ触置候ニ付右之通ニ
和泉守殿江戸表江茂申遣ス

門主浴ニ付万石以下門前掃除ニ而ハ且油断ハ候ニ而ハ家来共紙田割之通
東海道中仙台出立之節ハ高貴人ニ候ハ、又ハ御用之儀又ハ御書付之通人馬
ニ而ハ人馬ハ又ハ車ニ而ハ人馬ハ之儀ハ
右之通ニ付心得違ハ無之様ニ可被仰渡候

和泉守殿江戸表江茂申遣ス

一

此度人馬ニ而ハ減ハ之儀ハ無之候ニ付而ハ此度ハ人馬ハ之儀ハ
御用ニ付人馬ハ之儀ハ無之候ニ付而ハ此度ハ人馬ハ之儀ハ
右之通ニ付万石以下陸地ハ先ハ門前ニ而ハ不残相休候様

此度人馬減

一人足拾人　此賃銭　一人ニ付
　　弐匁ツヽ
一人ニ付　一人足壱人ニ付　此賃銭
　　弐匁ツヽ
一人足壱人ニ付　此賃銭　一人ニ付
　　弐匁ツヽ

右之通ニ付而ハ宿駅ニ而ハ減方左之通

五千石ゟ三千石迄　人足三人減　御子
布衣以下ニ而ハ　一人減

右之通書付右之荷物ハ船ニ積込候ハ、此分ハ減ニ不及候

[illegible]

覺

[illegible]

和泉守殿[illegible]

[illegible]

和泉守殿[illegible]

[illegible]

中詰家来出通[illegible]

通面[illegible]

右之趣[illegible]

和泉守殿[illegible]

正月廿[illegible]

二月八日　中山迄　川儀毋[illegible]

[illegible]

[illegible]

同十日

安藝守 同語玄蕃頭 山口信濃守 松平徳三郎 奥右筆組頭

奥右筆附 御掃除之者 奥右筆 表右筆 御用部屋坊主

中山侯 松平甲次郎 牧野左近 奥醫師 奥詰醫師

千人頭組九

一 御勘定奉行支配向御徒目付小人目付并右日割之内割合出立之段可申

一 海路御供之面々右之日割ニ家来出立之段ニ事

和泉守殿御渡 御目付松平甲次郎江達

右之分大坂表ニ而御載候 並御之節 御本陣ニ被出同所ゟ御城近く御供而御伏見

表ニ而 御上京之節陸地同所ゟ而御載二條御城ニ而 御上京之節之御行列ニ御加り被成候様

右之通陸地御供之面々ニ可被達候

正月

御信侯 八組

河内守殿御渡 御目付今須田久左衛門江達

方今之時勢不容易候ニ付 雖在候ニ付 此度 御上洛御当地御留守中ニ付御備 仰付

御門番其外之役ニ而 行付御役 家来人数之多少ニ不拘

手足達者出来候様可致候 右之通万石以上之面々ニ可被触候

正月

御目人御渡 御目付今回人達

今般御軍艦ニ而御上洛ニ付御先着御供之面々東海道中山道日割ニ而上京之段ニ付

之者路筋之船着出帆之節ニ宿割而被 並之諸家来共之宿割割渡 可取計候

右之通御供之面々ニ可被触候

正月

御目人御渡 御目付右同人達

此度之先達而被仰出候ニ付 路之人数之

御上洛ニ付当寺中ハ勿論支配下ニ至迄急度申付候、万一出火之節ハ早速大勢ニ而不残駈付消
防之儀組合之分ハ勿論其外寺社之者不残駈付早速消留可申候、尤寺社并町方之儀ハ家来
差出昼夜共見廻り、若怪敷者有之候ハヽ召捕可申候、且又胡乱成者見当り候ハヽ捕
之候ニ不及町奉行所へ可相届候、勿論捕逃し候儀不苦候

右之通万石以上以下之面々へ可被達候

正月

和泉守殿御渡　御目付小出大助より達

御上洛御発駕二月十六日より　御出立之処御日限御引上二月十日

右之通ニ付　御出立之処ハ御供之面々出立并道中日割之儀も追而可相達候様可被心得候

右之通向々へ可被達候

正月

御上洛御供之　御家内并四品以下諸大夫之方ハ大紋太刀装束着用、独礼之者供奉之

仕方之儀ハ麻上下着用可致候、惣而供奉之方之内ニハ平服布衣以上以下之方も右ニ准し

布衣素袍等着用いたし独礼之者御供仕候輩者心得之内ニハ

一　随従若御供之面々何之事も相心得、御心得四品以下之面々馬之儀も惣而供奉之内ニハ

右之趣御同意之面々ニ可被相達候　以上

正月

伊沢美作守
竹本甲斐守
大井美濃守
京極能登守
山口信濃守
池田修理

御上洛之節ニ従者御先ニ罷越候面々装束左之通相心得候

一　諸大夫以上之分ハ衣冠大紋并半袴

一　布衣以上之分ハ装束并半袴

一　御目見以上ハ素袍并半袴

一　御目見以下ハ当日之着用仕来り之通半袴相用

右之外守衛之何レも平服着用致し相越候様

右之通御届申上候　以上

二月　　

達之助　印

和泉守殿　御役所

御届書

御上洛之節天保山沖ニ　御船相繋候間御警衛

道中筋之儀ハ不及申上候間御達之日割之通被仰渡

右ハ諸藩兵隊警衛之面々ニ御座候

二月

四月人御上洛四月廿九日松平中将様御達

御上洛ニ付道筋御割之通

東海道

川崎宿　　箱根宿　　三島宿　　由井宿

吉原宿　　江尻宿　　岡部宿　　掛川宿

袋井宿　　浜松宿　　吉田宿　　赤坂宿

藤川宿　　岡崎宿　　鳴海宿　　桑名宿

関　宿　　水口宿　　大津宿

右之通可心得候

二月九日

豊前守殿　御役所

御家来衆中

御上洛ニ付而ハ御道筋之儀ニ付中山道御上京之儀ニ而ハ御人数多ニ付而ハ御休泊之儀ニ付而ハ御差支之儀ニ付

扶持人ニ而ハ御上京之儀ニ付而ハ御人数多ニ付而ハ御休泊之儀ニ付而ハ御差支之儀ニ付

右之趣ニ付而ハ御上京之儀ハ御見合ニ相成候様仕度

二月

右之通御届申上候　以上

二月　　

達之助　印

和泉守殿　御役所

御届書

御上洛之節天保山沖ニ　御船相繋候間御警衛

道中筋之儀ハ不及申上候間御達之日割之通被仰渡

右ハ諸藩兵隊警衛之面々ニ御座候

二月

四月人御上洛四月廿九日松平中将様御達

御上洛ニ付道筋御割之通

仙台宰相殿
竹本甲斐守
大井豊後守
山口信濃守
池田修理

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

御上洛ニ付　御先ニ被為入候而ニ来ル廿三日割之通出立之上道中筋川支等有之候ハヽ宿駅出立
之向ニ其節最寄駅場留置出立之向川支等不相成候ハヽ日割之通旅行致候様
休泊并人馬継立之儀ハ道中筋ニ而御差支ニ相成候儀無之様人馬継立日付ヶ川筋川所
休泊割等相向ケ分旅場所ニ而通達候尤人馬継立并休泊割等之義ヲ右之者共
中諸向其支ニ不相成様　右之通被仰出候間可被相心得候事　二月

御同人御渡　御目付前同人

御上洛御留守中之日雇　御城内ニ而十日ヶ間　御用之節ハ御目付ニ而相改可及候
又御目付ニ而御留守中御差遣　御留守中町人共日雇入不申候

和泉守殿御渡御目付新庄右近達
覚
御上洛ニ付　朝陽丸　咸臨丸　蟠龍丸
右御船来ル十六日出帆之筈ニ付右御船寄航之面々江可被達候事

和泉守殿御渡御目付新庄右近達　覚
御上洛之節御供船蟠龍丸咸臨丸朝陽丸ハ来ル十六日出帆之積り相達候処来ル廿日
御供船翔鶴丸同日出帆之積相心得候様向々江可被達候事　二月十五日

河内守殿御渡御目付小出五郎左衛門達
今般　京都四方山嶽之立木勝手ニ切採候族も有之為僧侶民共薪之憂も有之之
以来右様之儀無之様急度可被申付候
右ニ付京都之儀者料私領寺社領共不洩様可相触候
右之通可被相触候　二月

御供揃

一 鑓之御鞘　壱本　　一 十文字御鞘　壱本　　一 御持御鞘　三本
一 御長刀　壱振　　一 御簑箱　御色　　一 御杖

一 洋傘　　一 洋蝙蝠傘

一 洋燈　　一 洋机

右ノ通ニ候　ノ名ノ字様ニ相違無之候

二月

洋目付

覚

ノ上洛ニ付今九日出立致シ候

二月

佐倉藩

八組

右之ノ用ニ付今日ノ内ニ南北ニ馬場ヲ経ノ字ヨリ右ヘ廻リ真ニ上京

新道通ノ事

別紙ノ出面ニ通和泉ノ藩ヨリ仁淀ノ中進ノ

二月九日

佐倉藩

八名ノ

大井要徳

一 洋立傘

仁淀藩

大井要徳

仁淀藩

大井要徳

二月十日和川筋ノ洋引渡直ニ ノ ニ ノ 城ノ新

東海道通陸地 ノ上洛ニ ノ ニ仁淀藩ノ ノ

四十ノ洋 城ノ御ノ新

御警衛ニ到候ニ付十ノ外上列ノ ノ ニ仁淀藩ノ

（ミタシ）洋使者箱　洋使箱

洋上洛ノ道中洋ノ列到候ニ通和泉ノ藩ニ何ノ ノ

ノ ノ通ノ ノ ノ

二月

仁淀藩

大井要徳

和泉ノ藩ニ

覚

講武所ノ

洋使

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3　　ガラス使用

今般陸地　御上洛ニ付テハ道中筋ハ休泊御賄ノ旅籠向ヘ講武所指図役方ヨリ通行
行列ノ内ニ限リ人足ハ其後施行致ス可キ旨先達テ御触出シ有之候ニ付テハ
万一ノ節書状等預ケ置度旨申出ル者有之候ハヽ取調ノ上早速相届ケ候様
取計フ可キ旨通達ニ及ビ候事

右ノ通リ御触出シ候間

御上洛ニ付テハ御賄ノ宿駅ヘ

人馬差加ヘ候ニ付テハ御賄ノ宿駅ヘ

御賄ノ義ニ付テハ御触出シ有之候ニ付テハ

家来ヲ以テ通筋ノ中継ヲ頼ミ候ハヽ

御上洛ノ節ハ

二月

大久保権之丞

講武所役人

千人頭中

二月

大久保権之丞

諸向ヘ

通達ノ上ハ其日付ヲ以テ

差加ヘ候ニ付テハ書面ヲ通

旅籠賄ノ儀ハ

二月

大久保権之丞

玄蕃頭殿

（ミタシ）

御触書ノ代ヲ以テ

旅籠賄人

人足

二月

大久保権之丞

覚

書面ノ通リ御賄ノ限リ湯積ヲ以テ

玄蕃頭殿ヘ

二月

大久保権之丞

延引勿論当役所より紙面を以て人数書付
差出候様可被申達候

覚

一 旗数 弐本
一 日傘 弐本

右今晩より明夜勤番おのおの弐人ずつ
今日より番所へ詰休息向は寺小路
寺院より借受候筈に候間人数
寺院より通り小路に不出様に
大谷勢と申合可申候 二月十五日

和泉守殿家来 日付 沈田修理大久保権左衛門達

今晩 一 弐張 道中筋所々
二不及候得共万一の為人数
出候筈に候間この段
和泉守殿家来 日付大久保権左衛門達

覚

講武所より 大目付 江勘定奉行 日付

今晩陳地 一 弐張 残る者より
方へ廻り御帰りの節今日箱根山にて誤
候沈田修理へ届候様
和泉守殿家来 日付沈田修理達

久能山 一 東照宮御休息所へ
下向の節御供として
高天神より懸川へ
高天神より懸川へ

二月十五日

御同人 御役所

以上

久能山 一 宮へ奉幣
使として
懸川より浜松へ

右之通被仰渡候間
御心得

心得其外之儀ハ戌年被仰渡小袖麻上下着用可致事

御上洛御先ニ罷越　御旅館勤番之

御徒組

右者今般御上洛ニ付御道中筋自然川支等ニ而御滞留も有之候節
御旅館御発駕建方之義者一駅之内者昼夜打切不相成候間之内ニ御先江罷
出発中合ニ付代り合御旅館在番之時分勤番致之者御席ゟ交代致し不寝之番相勤候事ニ有之勤
方之義ハ委細組頭ゟ可承合ニ而有之候事

二月

大久保右近将監
池田修理

和泉守殿御渡　御目付池田修理達

今般御上洛ニ付道中筋宿駅ゟ帰之義ハ兼而御達之通御供之面々諸向ゟ可致
往还御供中并ニ大切之事ニ付　御在洛中并ニ御道中筋宿駅ニおゐて万一不取締之儀
帰之義ハ無之候得共以之外之事ニ付諸之者家来召連候者共万一心得違之者有之候而ハ何事も故障相成候間
ニ相成候事ニ付　御取締之為先達而心得違無之様可致候
右之趣御供之面々ニ而不洩様相触候而本宿駅ニおゐて者右之趣厚相心得　兼而不取締
之心得方万一不取締之儀有之候ニおゐて者其筋ゟ遂一応糾明之上品ニ寄ニおゐて者不容易
曲事ニ可被及旨兼而御沙汰有之候間可被得其意候　二月

二月晦日長山宿御泊ゟ左之通

更向之者ゟ行違之者有之候ニ付右之者ニ而人足之義御目付大井之徳庵中ゟ申上候
其上下人数書付人ゟ御沙汰違ニ付左之通

覚

小人目付
伊東八三郎

仙石播磨守
家来
中間通日雇共
拾九人

右之通可申出旨　二月晦日

和泉守殿内海治右衛門大井要治右衛門ヨリ

呼状写大津駅　内藤摂津守役橋　到上刻

右之通ニ　作出ス写ヲ以テ両人ヨリ御届ケ書

三月写差添宿休所ヨリ写取ノ日付達

一二條ノ在城中ヨリ作紙出ス　本書　加書

都合四枚ヲ勘書ニ認メ勘書ヲ両人ヨリ諸切ノ事

一当家内ヨリ　内所向ヨリ勘書ヲ以テ申二十勘ヨリ十二勘ヲ請切ノ事

一当在城中ノ夜詰引上ケノ事

右之通御心得ヲ以テ取扱ヒ御達ヲ以テ御届ケ

一二條ノ城ヨリ　内意ノ御届ケヲ以テ勘書ヲ真ニ右之通勘書ヲ以テ

御届ケ書ヲ以テ御届ケ

和所ヨリ出有之候ニ付テハ御届ケ之儀又ハ御断ノ

一呼ニ来ル勘書ニ認メ右ノ御届ケ書ヲ以テ休息所ヨリ二組出勘ノ事　三月ヨリ

三月晦日迄ノ事

一今般ノ作紙ノ制限ヲ以テ作出ス旅宿日付記置達ノ分

御達ノ趣ヲ以テ

三月　　四名板

活辺ヨリ

三月晦日付和泉守殿ヨリ達

大津駅ヨリ　内藤ノ家来

一当番　　九ツ時

右ノ通ニ諸向記立ヲ以テ両人ヨリ先ニ筆頭大船ヲ以テ御乗船ヲ御断出之

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3　　ガラス使用

[illegible]老中若年寄二書具近ク呼ク出立ノ節ヲ
一二書具　八ツ時
右会釈ヲ諸向近ク立場ニ而ノ積左程合ノ事奥向ニ中込ノ
一三書具　七ツ時
右之守衛等ヲ奥向ニ中込ノ上ノ独礼出ノ以具ヲ改ノ候ハヽ
右ヲ該候ハヽ滞ノ事ヲ心得中達ノ以上
三月

侍従衆中
侍従衆中

和泉守殿ノ法ノ目付大井更沈田修理達　覚

一呼ノ　勅使伊勢参宮ヲ該ノ事ノ候ヲ而ヲ達中ヲ
事
三月ヲ

大井更沈ヲ
沈田修理

三月ノ　ノ目付達

二條ノ在城中治ヲ書ハ勅ノ　ノ目見ノ節ヲ者ヲ
和ノ人数ヲ該ヲ者呼今ヲ以後目付南書院ノ出ノ
三月ヲ

寄嶽殿ノ法

一呼ノ成年八月ノ法ヲ　ノ後江戸出ヲ
流罪、軍役ヲ向三ケ条中ヲ
此候ハヽ達ヲ

三月ヲ

三月ノ日付松平中務大輔達

一呼ヲ呼ノ勝出仕ヲ
三月ヲ

三月四日達

還御之節道中為割可用意達出之旨付出名前之人数為数出候紙之者
此間松長納屋并松者方ニ而差出之候ニ付其通ニ而

三月

今度　還御之節ニ付方人数お伺之道中為ニ混雑之儀ニ付而ハ荷物ニ候共
此度雑所ニ積込之積和泉守殿ニ伺お済等ニ候事ニ候ハヽ松者ニ而お達置候
別紙之通　可所表ニ而ハ仕出等為心得向ニ候ハヽ
此度事ニ候ハヽ　勅使　御警衛お延ニ等　三月

可所ニ而　仕出等真能向ニ候ハヽ

三月

右之日付松室甲斐守達

一東之門　一ニ構木戸門

右可用意等ニ而お通ニ在家来ニ等ニ候ハヽ
但在中之日付可申通

右之通ニ而ハ達置候ニ付達候ニ付　三月　松室甲斐守

和泉守殿ニ御日付松室甲斐守達

此度御警衛ニ付来ル　内ニ等　ニ神変中ニ候ニ付役料ニ者
ニ候ニ而ハ　右之通万石以上ニ而ハ　三月

覚

来ル十日加茂不上社ニ　行幸ニ付ニ在京中ニ候万石以上ニ者　御所ニ

位置在京ヨリ百石以上佐幸ヨリ作作ニ付格ニノ条ノ
ヨリ後ニ付召連人数ヲ指ヲ減少ノ者ヲ後様ニ而ヨリ
三月

従日人生添

以書付ノ別ノ条　内ヨリ　位置京ヨリ作作ニ付格ノ
ニ而ヨリ従使番ニ　小十人ニ而ニ　以下ノ
覚
以書付ノ条　内ニ付御中納言小袖廿下
右之通ニ御座候
三月

以書付ノ条内ヨリ施薬院家ヨリ差出候様ニ
還ノ事柄ヲ不及施薬院ヨリ直ニ指出候様ニ
以上

以書付ノ条　内ヨリ佐幸ヨリ百石以下ニ而
ニ而ヨリ従使番ニ　三月

右之通ニ御座候
三月

御条内ヨリ御四品ヨリ而ヨリ馬上ヨリ佐幸ヨリ御答ヨリ中立賞ノ内ヨリ馬ノ
候ニ付右ノ内ヨリ施薬院ヨリ右ノ内ヨリ
不及届ヨリ供ヨリ御事ニ候
右之通ニ御座候　三月

覚

以書付　ノ条内ニ付ノ作ニ而ヨリ施薬院ノ
ニ而ヨリ従使番ニ　三月

右之通ニ御座候

ノ上ヨリ中旅宿地創桶界盛ヨリ御儀ヨリ大豆糖ヨリ
ニ而ヨリ代料右ノ代ヨリ
右之水吐和泉守殿ヨリ上此段及ノ達ニ
三月

別段
一 飼桶 代銀八匁 壱ツ　一 馬盥 代銀三十匁　一 草飼籠 百巻目ニ付 代銀百匁 但壱貫目ニ付拾目
一 大豆壱石ニ付 代銀四百拾匁　一 糠壱石ニ付 代銀弐拾匁　一 藁 拾把ニ付 代銀四分
但 金壱両ニ付 銀七拾六匁六分 銭六貫四百文
右之通相定候　亥三月
和泉守殿御渡 同日付松平甲斐守達
覚
陸地 御上洛之義ニ付 往返之処 御用向も有之 御参勤之面々格別出精相勤候ニ付長途之
御旅行御苦労ニ被思召候 御宿亭道中筋迄御帰方も有之 一段之事ニ候 格別出精之趣ニ候
右之通被仰出候間 可被相達候事
覚
御先発御供之面々 還御之節 御上洛之節通行之分 先触差出候 尤御通行之折
人足并諸荷物員数 人馬数並ニ上下人数并 旅籠何日之分迄 十日之限り 其余之
御参勤之者 右ニ道中之村々ニ而 可承可相達候様可被致候
右之趣向々ニ可相達事　三月
還御之節 御用物を始 御供其外 御用諸荷物 貫目掛改方之儀 旅籠津宿へ
改之事 御休所并宿混雑いたし候ニ付 大津宿之内ニ而 伏見改所設置 右京 御手代本多
三保始 御家来并草津宿役人 右役所ニ出張 荷物并改候ニ付 諸事手操い
不込合様 荷物之員数 右改を請 可相達 尤人足不足出来候之筈ニ候
右之趣向々ニ可相達事　三月
御在京中二條 御城ニ於て諸向之面々 布衣以上并末々迄 夕七ツ半時 御老若方退出之上
是迄湯漬被下候 夜九ツ時之迄 御退出無之節ハ 二度目湯漬被下候
但 御膳并振舞 焼飯之内ニ而 被下候ニは
一 湯積并右之代銀ハ 方不成 夫人数取調 日付 中立 差出候様可被致候
右之通 和泉守殿御渡 日付 相達候　三月十九日

還御之節御供并御用ニ付而者陸路持越之荷物并持夫之儀者都而人馬共方
之義京都之通り御用日掛減ル三分一半之積を以人足可申候　御茶屋役所者右之
日ニ割合差上候　御泊之宿方ニ而者追付可拵之段先達而通之節兼而心得可申
積込之方隙ニ而前日人馬之分出置候様心得可申候

右之趣向々江可相触事

三月

三月十日　年頭之　勅使着　城ニ付表向五半時揃

同日　両伝奏又着　城内ニ而御礼有之候筈

右之通ニ付　勅使着　城之節者先達而相達候通相心得自分之御礼申上候
節者直垂狩衣大紋布衣素袍着用之事

一御序ニ不拘両人之役料少被為下置候事

右之通向々江可相触事

三月

此度御上洛ニ付御先并御供ニ而上京相勤候者共方并御役支配之内御目見以上之者
諸役名姓名并同以下之分役々人数書出し来ル廿日迄相認書出候様可被達
候事

三月

大井兵衛

池田修理

御在城中布衣以上之面々ニ者諸料理之ニ而可被下置候　其内当日ニ者能之節ニ而庖食之何人
宛も申義臣細御徒不之様者共之御答可有之候

三月

右両名

昨十二日御暇　御参内御直引退キ之進之趣被申候　依之可申出旨被仰出候

三月十二日

覚

昨十日加茂下上社　行幸ニ付宗折　御参内且又供奉ニ返　還幸之上も供奉

吟味内達の趣仰渡候間この書下
三月十日

覚

昨十日加茂下上社江　行事佐拳達之旨仰渡布衣以上ニ而慶中目志利為之候
右之趣向々江可達事　三月十日

吟味筋ニ付小十人頭江　小納戸頭江

昨十日加茂下上社江　行事佐拳達之旨　吟味内仰渡候小神楽
右之趣向々江可達事　三月十日

昨朝生玉別当醍醐ニ付　吟味内ニ付御行列ニ而罷出候
但平服之積候ニ不及旨

右之通向々江可達事　三月

昨朝生玉醍醐　吟味内達之旨ニ付仰渡六半時

一厩中稽古小神楽上下

右之通向々江可達事　三月
（ママ）
江戸城内

今般陸地　吟味筋ニ付之旨吟通中筑川ニ而
一時ニ蒸溽ニ而病死之者多ク有之候ニ付隊伍ヲ終
ル者ニ川場ニ而人数揃方ニ大略石綱左之事
一此方待向川ニ而白布二幅三尺五寸ニ裁ニ末文路ニ通ス記シ一組ニ二流ニ而
此旗ニ而ハ御幸ニ而ハ無之ニ付ニ而ハ御行
四本ニ組ニ而先ニ立ル毛右ニ裁下結付代ニ而ハ
一吟味筋
（小荷駄掛）
一歩行組
一吟味筋
一歩行組
一講武所方
一吟道具
一奥向

一 手伝組　　一 手張仮組

一 支隊活版を操出しの時を重ね堤に建る両岸を経て仮組の終る事

一 印刷に於ては建仮終て支那版の試刷に付ては両岸を解印刷に於ては立第三隊なる川隊は目標第二流と長筆を結付ある隊を者指て人数引揚ね活右岸をみ伏なをみ第四隊は出ね解川隊は揚出しの五隊は整列致候後

一 仮方版と縁越しの時長刀川隊はお立ちの地勢に拠る勢時は狂縁なる在の後ね隊支部の時は版仮組を始何まで以形に居ある不慮に備ね隊は日付を人附添は通具整活向岸は以列を建る上要向は越立ち直し

一 印刷終ね事

一 手活ね終ると活版組支ね勉用勢を操仮部書面を終る場所に表支ね重略なる事の時を前もって話ね心得の成丈は締向出版

右之通仮御定め心得書る以上

三月

手伝隊長　小十人隊長
手組仮隊長

印先書は後組ら引

大井宗徳
池田修理

追而本文印(古付)を印出し候節各方御届出ね事

三月十四日

昨十四日用向の礼ね之ら出候向ね事

和泉守殿ヶ浜松平甲斐守達

使番 佐藤彦兵衛 小十人頭 納戸頭

覚

御上洛ニ付供之面々ニ而ハ道中宿割等ニ差支候ニ付
今般左ニ掲ケ候ヶ条ニ而ハ一費ニ相成候ニ付
御手当金銀江戸表ニ而ハ四ヶ一両ニ而ハ半減ニ相渡
下向之節ハ元ニ戻シ相渡候ニ付
左之通リ心得ニ而ハ御供之事

三ヶ月

使番 佐藤彦兵衛 小十人頭 納戸頭

在京中二條ヶ城ニ而ハ御手当ニ而ハ布衣以下ハ
京都ニ而ハ御供之面々ハ
京都ニ而ハ御供之面々ハ

三ヶ月

振舞又ハ焼飯ニ而ハ
画ニ而ハ混雑ニ付
心得ヶ違ヶ間敷

三ヶ月

和泉守殿ヶ浜大久保相模守達

御滞京ニ而ハ十ヶ日ヶ治定ニ付
ヶ違ヶ通ヶ違ヶ候ニ付
左之通リ心得ヶ違ヶ事

三ヶ月

三ヶ月ニ而ハ御手当金ニ而ハ
一金七両ニ分ニ

大井兵治
池田修理

銀七拾五枚 此金五拾三両三分ニ

一金七両ニ分ニ

但六番飛乃飛來飛込五ツ下ニ而ハ如此ニ候略之以右之通ニ而

一金八両三分宛　但八両三分飛来ニ而ハ如此ニ候略之

覧

還御ニ付　御休泊先を通ニ仰出

御休　箱根　大磯　三島　小田原

等法　山中　程ヶ谷　品川　蒲田

佐屋　見附　新居　白須賀　二川

金谷　岡部　藤枝　島田　金谷

由比　原　吉原　蒲原　川崎

右之通ニ付御届申上候　以上

来ル廿日頃　御発駕東海道　還御ニ付

三ツ

還御ニ付而ハ御方人数多ニ付混雑不致様仕度ニ付

御先表ニ荷送ニ横和泉方ニ而ハ御泊ニ付路ニ付

御方ニ而ハ船宝ニ而ハ実ニ船方ニ者在京不致ニ付

乍路ニ而ハ荷物ニ而ハ実ニ船方ニ者在京不致ニ付

三ツ十七日

来ル廿一日頃　御発駕東海道　御泊

大井宿伝馬

板橋一ノ町

可達候事　三月

還御之節御道中御供建別紙之通和泉守殿江伺之済申候依之申達候御家来江
之上下共御返答ニ而可有之候

三月　松浦西五郎
大井田徳ち

三月十九日御本丸御達

一　服紗袷不及候　一　壓斗目御用意之事

今十九日即刻之御供揃ニ而　御家内ゟ　御出ニ付服紗小袖上下御召用即刻
御出輪ニ相成右以小札申入候　三月十九日　奥津甚右衛門

仙石播磨守殿

和泉守殿御渡

明後廿日当地　御発駕ニ被遊候　御所ゟ御出之節為在之候御府

御発駕御延引被仰渡候京ニ被遊候ニ付　御出之時御向ニ而御達候事　三月

ミタシ
御目付中御使番衆御徒頭衆小十人頭衆御納戸頭衆

攘夷之詔御奉戴ニ付而は拒絶之應接ニ及候処不致事ニ相達ニ付御持参
御出之一同厚相心得　御出府ニ付家来一同厚忠節候

右之通万石以上以下之面々江可被達候　三月

覚

今度　還御之節御道中御発輿御日限之割合被仰出候而　当時休泊之宿
都合ニ而御休泊割之通相心得旅行可致候　右ニ付別段御用無之向は中山道通行可致候
猶相心得家来末々迄何事も差支無之様厳重ニ申渡置可被候

右之通御先江被仰出候面々江不洩様可被達候　三月

御先御供相立候　御徒方

右之旨趣　〃安堵之御二條　〃惣分大津荻之浦　還〃元之西川荻之
通勿論　〃之ごとく永代領知被仰渡之上者
三月

和泉守殿
備前守殿

覚

右昨廿四日二條　〃御城江罷出候而達之事
於御座之間老中列座之上
〃御目之前ニ而老中より之書付を以被仰渡候
目付南部所江御通被申渡候之通達之事
三月

大井兵部少輔
池田修理
松浦肥前守

〃休泊附
〃小休

山科　〃小休　大津宿〃代官
　安祥寺　　石原清左衛門
　　陣屋
多居村建物
本陣　五兵衛

〃泊
〃小休　本多下総守領分
　　石部宿本陣
　　九兵衛

〃小休　江辺寺内町
六地蔵村宇治へ来
加藤隼人領分
水口宿本陣　弥右衛門

〃小休　〃代官多羅尾氏ヲ以支配所
大野村立場本陣
又左衛門

〃小休　杉谷周防守領分
猪鼻村立場本陣
藤左衛門

〃泊　石川伊予守領分
宇喜多本陣
問人領分
小田村　善兵衛

〃小休　大津宿〃代官
石原清左衛門
　　陣屋

〃泊　本多下総守領分
多津宿本陣
　　九兵衛

〃小休　本多下総守領分
石部宿
本陣　金左衛門

〃小休　杉谷伯耆守領分
三宅村字田川
　　元右衛門

〃小休　上向之領所
土山宿本陣
　　重左衛門

〃小休　〃代官多羅尾氏ヲ以支配所
坂下宿本陣
　　七郎兵衛

〃小休　上向人領分
鈴山宿　本陣
　　与三郎

〃小休　〃代官多羅尾氏ヲ以支配所
庄野宿本陣
　　左兵衛

池田修理
松浦肥前守

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

吁泊	吁休	吁泊	吁小休	吁小休	吁泊	吁休	吁小休	吁小休	吁泊	吁小休	吁小休	吁休	吁小休	吁小休	吁泊	吁小休	吁小休	吁小休	吁小休
水野出羽守領分吉原宿今泉村遠士山分寺 東泉院	吁休	吁代官江川太郎左衛門	右同人支配所	右同人支配所	右同人領分	大久保加賀守領分	小田原宿本陣	右同人領分	大森宿本陣	吁代官江川太郎左衛門	茅ヶ谷村字南湖立場	吁代官江川太郎左衛門	戸塚宿本陣	保土ヶ谷宿本陣	神奈川宿支配所	川崎宿本陣	吁代官江川太郎左衛門	相模国高座郡	北蒲田村梅林
東泉院	雷左衛門	六右衛門	宗保寺	畑右衛門	金右衛門	戈三郎	清左衛門	弁右衛門	清兵衛	勘右衛門	吁代官江川太郎左衛門	陽右衛門	勘右衛門	松雲寺	作左衛門	半雲寺	作左衛門	長四郎	久三郎

吁代官江川太郎左衛門 品川宿 東海禅寺

吁休

和泉守殿

大樹御所様御支配ニ付 和泉守殿御通 御宿寺院

通 吁御住職ニ於テハ諸大名以下宿泊万端指揮致候

事ニ候ハヽ 吁親征義ニ候間 速ニ御請奉申上

畏御請奉申上

三月 日

御諱

三ノ廿五日昨廿四日吁御着

今廿五日昨刻ヨリ吁休泊ニ付 吁本陣ヨリ 仕出ス

一膳ニ付百文ニ十五人ニ通 一膳ニ付百文ニ十五人ニ通

右之通昨日南番谷達来ル

三ノ廿五日昨廿四日吁着

昨廿五日 吁御着ニ付 吁御宿ヨリ仕出ス

右之外本當分達来

今般　還御之節伏見沿　通御ニ可遊候処右席之義者何事も不致候てハ依方一同通
一　行列ニ相加り候人足休足不請不都合之事ニ候所列ニ相見候者共都之東西分道ニ
宮駅ニ泊済之後右筆者致分前前ニ付船中ニ於て被裁ハ答ニ及候

右之趣相心得可被申達候以上

三月

大井美濃守
池田修理

今般　還御之節伏見沿　通御遊候ニ付右席之義小駄ニ而者依方多人
数之家具并荷食借上方之差支ニ付都而振合ニ拾ヲ以之人足者役部ヲ可相手当し
物相済候之分宿継済し家来之何事も作之役色ヲ差出定籠之儀者決定宿掛之
積相心得候且休足分熟田近道掛ル候余も無之ニ付徳並有用之不残作之
役色ヲ以上下共差支不申相済右之賄料都合之差分相掛ル積り候

右之通相心得可申達候以上

三月

大井美濃守
池田修理

（ミタシ）清目付衆　徒頭衆　使番衆　小十人頭衆　小納戸頭衆

覚

来月四日石清水社　行幸之節　公方様ニも供奉可被遊候ニ付出候役向ニ而心得可
ニ達候事

三月

覚

此度石清水社　行幸ニ付供奉被遊候節ハ社造之義ニ付出格之訳ヲ以ハ供之面々并
又ハ御近ハ従ニ而召上下人数書ヲ以御定所ニ可差出候

右之趣ハ供之面々ニ可相觸

三月

覚

来月四日石清水社　行幸ニ付而ハ当日限リ之義ニ候条
可所々ニ仕出シ之儀ハ可為無用ニ候事
附　当月晦日可為礼参ニ候事

覚

来月二日巳半刻　可集内ニ而遊女拾
但万石以上ニ而ハ家老ヲ始メ
ニ名ニ　可目付壱人
従者弐人　歩行弐人　小十人
弐人　鉄砲弐挺

覚

来月二日巳半刻　可集内ニ仕出シ有之間敷
可集内ニ而遊女拾名仕立ル義ハ不苦候事

三月

三月晦日

三月

三月

覚

附二百　可集内ニ仕掛五ツ時　右ニ遍向ニ而ハ不苦候事　四月

覚

時之　可集内ニ有之候ニ而ハ可為無用ニ候事

（改目付池田修理達）
石清水社ニ　行幸来十日御刻ニ仕出シ之儀ハ
堅可為無用ニ候事　四月

一時務策　一文章　一講釈
一會讀　一雜書

右之通方ヲ以テ内ニ而纂ニ候ニ付出願之者共ニ
ニ而ハ候ニ不及事　四月

来ル十日石清水社　行幸供奉遊女拾名ニ候ニ付而ハ
可ニ而遊女拾名ニ候事　四月

池田修理

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

覽

仙石播磨守組
四位紙衣
幸七郎伴
門人組四位紙衣
見塚幸助
支二十七歳

一時勢策　一元章

右之内有位

右之分南地在京之者お以之外在中之面々

見塚幸助
宮沢主馬

四月五日

右之通此度李門書所江屋敷出中之内ニ而有位
和泉守殿江差出之書付ニ姓違当りニ而方々
講武所奉行承之　三書院ニ而　町奉行
勢書院ニ而　目付部屋ニ而　使番ニ而
小十人部屋ニ而

攘夷ニ朋限切迫ニ而滞京中ニ分之義ニ心掛不
申候上洛之上成丈ケ実意ニ而解兼候ニ付速ニ
任ニ退散有之候処和泉守攘夷朋限切迫ニ至ニ付
山上栄助政一ニ付攘夷之儀

為の後と存一回山吉原お心得報五ツ赤心掛ケの勿論洋京中御手配
陸ゟ筆勢登ゟ為ゟ関東ゟ為の在坂衆ゟ存念ゟ闕争ゟ気力ゟ有人ゟ
お呂ゟ下ゟ力ゟ子情況等ゟ主意和ゟ精意貫徹ゟ為の事
和泉守殿ゟ治松宮甲次郎達

（ママ）
廿日付京ゟ使書京ゟ後飛京
昨廿日石清水社ゟ幸ゟ付ゟ行列ゟ節
ゟ還幸ゟ節ゟ供奉ゟ内ゟ
一条中納言殿ゟ御参内ゟ節ゟ右ゟ通向ゟ御達ゟ事 四月
昨廿日石清水社ゟ幸ゟ付ゟ行列
本ゟ書 奥清兵衛 加書 （阪本平八郎 宇野東次郎退出 御成婚出来）
右慶応四辰年四月廿日

供奉書

仙石播磨守殿
御所ゟ石清水迄奉ゟ組
石清水ゟ御所迄平八郎組ゟ頭奉ゟ亜
御成還御共 御所ゟ旅薬院ゟ二條迄右二組頭奉之助

右慶応四辰年四月廿日

仙石播磨守殿
戸田寛十郎殿
諏訪左兵衛
（病気ニ付不参）
渡辺為三郎殿

（奉ノ組差図）
荒尾平八郎
本多奉之亜組ゟ

御鳳輦御警衛

三組 播磨守
寛十郎
左兵衛

随身加勢

右ゟ通ゟ被仰渡ゟ趣ゟ御用旅薬院ゟ供揃一時ゟ勿来ゟ様
仙陣笠草鞋ゟ用意

四月十日 本ゟ書 本多奉之亜

六名ゟ名札

明後十日石清水社　行幸ニ付供奉ノ途中ニ警衛ホカ通ノ心得

一御供警衛左右ニ警衛　大凡八百人

　　内訳　三百人　新ニ當ル　弐拾七人

　　小十人　弐拾弐人　徒三組　六拾九人

一隨方加勢　大凡弐百人

　　内訳　弐拾三人　京院當方目印　五拾人

一石清水ヲ始内ヲ警衛人數増減ノ事

一行幸前ニ而ハ裁附別羽織着用ノ事

右ノ通御心得可ニ而ハ達ヲ二條　所掛ノ當所ヲ始メ諸方ヘノ義ハ奉加向ヘ申談警衛ノ義ハ京都ヘ申談ノ事

　　尤京都方ヘハ御目付ノ者ヲ以テ申談ノ事

　　大和守

　　淡路守

　　四月九日

一追而本文ノ通別紙ニ認御渡ニ付テハ御達ノ後御返シ可被成候

四月十日夜九ツ時過来

　　出方様ヨリ御郡方ヘ懸合ノ義ハ行幸供奉ノ所ニ付

　　追而隨方加勢ノ義ハ御止メ

一行幸儀ハ御止メ

一供奉ノ内ニ而ハ葉内町ヲ經由ノ旅宿ノ事

一石清水ニ而ハ御下向ノ節ハ御止メ

　　四月十日

　　御道筒

　　仙石播磨守家來
　　頃　諏訪左右エ門組
　　仙石播磨守組
　　戸田寛十郎組
　　添田又之助組

　　沈田修理

右之通可被申渡稟却被致承知候条為念申入候
以上

四月十日　　仙石播磨守

一　稲荷旅所ゟ城南離宮迄前ゟ出入口之事

一　柱川渕ゟ先ゟ西岸堤通淀川端山際道迄

一　淀城下宿町口之事

一　紙伏見ゟ方西川西川端居法ゟ

一　芭蕉村ゟ淀川端篇山下橋元宿ゟ方迄

一　淀大橋際ゟ東ゟ通宇治道筋ゟ脇町筋山上枝道ゟ

右之通和泉守殿ゟ仙石播磨守迄　四月十日

阪紙大手組　　奥津喜兵衛
仙石播磨守家来　　
阪紙大手組　　
仙石播磨守家来　　諏訪兵馬
紙伏見引請　　仙石播磨守
家来　　右田人
阪紙大手組　　
仙石播磨守　　戸田寛十郎
淀辺為手　　
松平甲斐守　　

行事共通ゟ被申渡之上ゟ本書ゟ口之廉ゟ通

南町奉行　　
切封

和泉守殿ゟ淀ゟ日付松平甲斐守宛

町ゟ落候ゟ候ゟ南ゟ之柱材方ゟ於江戸表ゟ被申渡ゟ候ゟ
成ゟ五十日ゟ内ゟ南地ゟ之儀ゟ以来ゟ場ゟ右代ゟ之ゟ
ゟ之ゟ会ゟ有ゟ之ゟ万石ゟ以ゟ南ゟ之ゟ通ゟ之事

四月

大目付　　酒井仙右衛門
町目付　　
松浦四郎兵衛

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

川村脩一郎
御勘定吟味役
鈴木大之進

万石以下並寺社領へ相触候右之趣相触候
右相触書所前満豊前守殿ゟ御渡之趣江戸中被申　四月朔日御達
為承知浦賀奉行江以

両番頭　新番頭　御先手
御使番　小十人頭

二條御城内明後二日ゟ流陣原并角場ニ而大砲稽古有之候合相州箱ニ附申渡候
細之義者町奉行ゟ目付ニ而可被申達候事　四月十二日

四月十四日付御達
明十五日月次御礼ニ付此度目付設楽岩次郎申渡ル

一　明十二日時勢策文章差出候四人之者ゟ御十組御掛御扇子弐本小菓拾組宛被下旨向々達
設楽岩次郎分ニ目付ニ而直ニ御礼申上四人之流申上候而申渡ル中ニ
一　旗御扶持金之者御組之者割付候上ニ而御渡之分御組之者申渡候也
金百七拾壱両弐分壱朱ト　銀弐匁八厘
右七人ニ割　但壱人分
金弐拾四両弐分ト　永九文九厘九毛
廿銭弐拾九文
右之割合相成申候此金相渡申候
四月十四日
五名枚
為六郎

ニタシ
法後役免
明十七日金地院　御宮参為御名代御老中方ゟ諸役人江戸表　御名代之節之振合
之以御役居候場所手入ニ而相調之上割銭給置前ニ来置候相談ニ而近所へ返し候

四月十六日

池田修理

右之時十七分金地院　庁官ニ庁太刀ニテ受ケニ付時院ヲ来ル

四月十六日

右之通申来ル旨ニ付　庁名代ニ書残人数ニ而公用ニ出ル

四月十六日

牧山時院ヲ出ル

時十分正四時ニ出仕ニテ着ス　庁案内ニテ通ル

書ニ通忠内ニ依テ一時ニ出勤ス　四ツ半ニ退ス

四月十七日

一殿中　役紛裕麿上下　一庁供同断

本多集之助

荒尾平馬

池田修理

五人

供ハ庁ニ

右之通東照宮ニ庁太刀ニテ受ケニ付時院ヲ来ル

四月十六日

牧山時院ヲ出ル

時十分正四時ニ出仕ニテ着ス　庁案内ニテ通ル

書ニ通忠内ニ依テ一時ニ出勤ス　四ツ半ニ退ス

四月十七日

一殿中　役紛裕麿上下　一庁供同断

本多集之助

荒尾平馬

池田修理

五人

供ハ庁ニ

仕旅業院ヲ　庁案内ニテ出仕ニテ殿席ニ着ス

泉水殿ニ於テ御目付松平甲斐守殿ヨリ達ス

（ママ）

四月十六日　御使者ニ而　御普請方　御小十人ニテ着ス　御納戸ニテ着ス

摂海之堤要之地ニ付形勢為　庁覧罷来ル旨ニ而大坂表ニテ為　御役方ヨリ仕出ス

被命ニテ之達ス事

四月　右之　庁在坂之節之

之紹物出ス　後略之

時院ヨリ石清水社ニ　庁参詣之大坂表ニテ為取ニ付　御普請

一石清水社　庁参詣之ニ付為役ニ代ニ要向ヨリ大目付ニ届ニ拘ヲ分

役紛裕麿上下之ニ而ニテ之ヲ為取帳ニ

一殿中　平服

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

左之通向ニ御達之事　　四月

今般大坂表ニ於テ　御仕置御延引之段数度之後ニ付仮ニ荷物ホ
ノ御文臧ホ村越ニ而之御達之事

左之通向ニ御達之事　　四月

本文ノ書付之通ホ之ホ荷物ホ之義ニ付仮ニ御答仕置
方ニ於テ御達ニ付左同人方ホ特ホ呼出シ候条小格ヲ以テ
呼送ル伏見表ニ而大形ホ私ニ積荷大坂表ニ於テ
先御届出ノ有之ニ付

御通書　　四月

二條　ノ城東ノ口ホ右ニ堀川大宮通ル右ニ四ツ塚左ニ鳥羽街道横大
路村　御仕休八町縄手通ル左ニ淀小橋　御渡越同所ニ而

御昼休ホ大橋　御渡越右ニ葭原村通ル左ニ神幸道濱本坊ニ而
入石清水社ニ　ノ系詰お備宮坊ニ　ノ立寄
御召場ホ而船ニ而　石淀川筋大坂備前嶋
御城京橋口喰違ホ而堀通大手御門
右之通何れも御渡中ニ依之申達ニ而以上

四月

廿日夜五ツ半時来

一明廿一日明七ツ半時ニ供揃
一出御ニ而玄関通
一ニ之門新相済申ニ
一ニ而賊　御昼休ニ而度ト而船ニ而度ト

松平甲次郎

右之通候条以上

四月廿七日

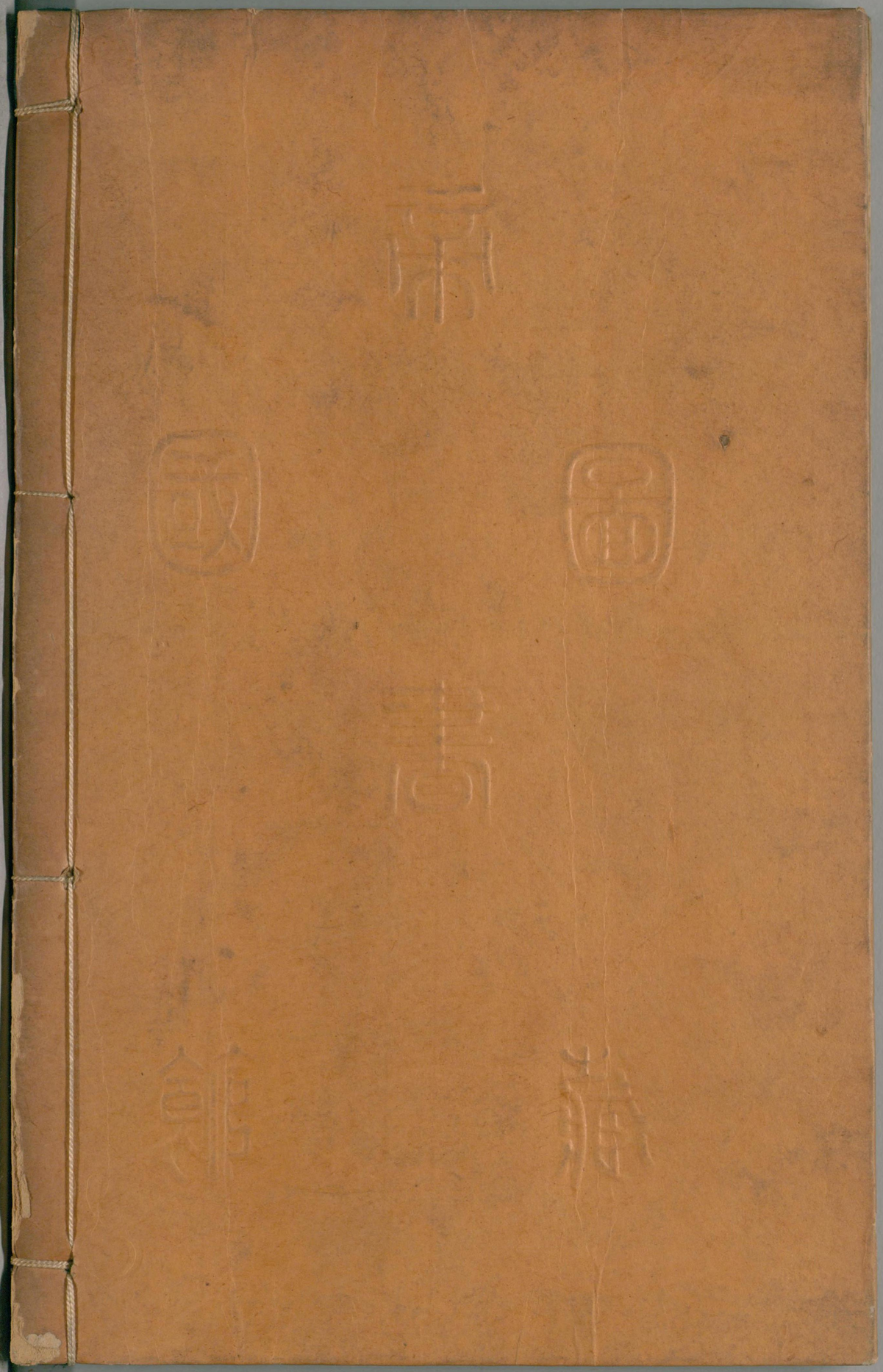
仙石播磨守殿

奥津亀左衛門

836
209
3

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用